
魔法少女まどか マギカ ~ヒカルヤミノハカイシャ~

リョウト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女まどか マギカ くヒカルヤミノハカイシャく

【Nコード】

N2856Z

【作者名】

リョウト

【あらすじ】

詩的な魔的な物語の世界を旅だった木之下暁。

命じられたのはバッドエンドの回避。

贖罪の旅の中、その瞳は何を見るのか……？

第一話目 ダークディケイド

人の、山。

瓦礫の、山。

人の、山？

ガレキノ、ヤマ。

壊し、壊され。

愛し、愛され。

殺し、殺され。

助け、助けられ。

泣いて、泣いて。

救い、救われ。

それでも、『この世界に生まれてよかった』と。

それでも、『こんな世界、
んでしまえ』と。

あなたは、言えますか？

ワタシハ、イエマスカ？

.....

「ああ、ド畜生。ここ、どこなのかねえ？」

高層ビルが立ち並ぶ近未来的な風貌を醸し出す、群馬県のどこかにある、『見滝原市』。

その一つのビルの屋上に、パツと見はきれいな茶髪でスタイルも顔つき、背格好からしたらグラマラスな美少女、『木之下 眺』。そんな少女から出た言葉は、あまりにも男勝りが過ぎるような印象を与える。

「サラシとって着てみたはいいけどよ、これ、どっかの制服だろ？見るからに」

少女はハア、とため息をついた後に左腕についた『相棒』を叩く。

「おい。『ブレイクハート』。お前、耀己からなんか聞いてねえのか？」

「一応は。住むところ、通う中学校の住所は与えられています、表示しましょうか？」

「当たり前だ。そういうことはきちんと真面目にやってくれよ。なあ？っていか中学校ねえ……周りのノート写させて貰ってた記憶しかねえなあ」

『……Yes, master』

そしてその『ブレイクハート』と呼ばれたブレスレットは空中に

地図、マンションの見取り図などを映し出す。

「へえ……いいところじゃん。海鳴といい勝負だぜ」

『あなたはマンションに住んでいなかった気がいたしますが』

「いーんだよ。こづいづのは適当で」

そついいながら少女はフェンスの金網に手をかけ、向こう側へと飛び降りる。

「じゃ、近くまで飛んでいきますか」

『魔法ですか？』

「何言つてんだブレイクハート。俺の翼は何のためにあるんだよ？」

そして少女は一步踏み出し、そのまま屋上から墜ちていく。

「未現……」

そして少女の背中に翼が生え始め、白く、純白の翼が広がる。

「物質^{マター}あああああつー!!」

そして翼をはためかせ、夜の闇へと消えていった。

.....

「そんな夢を見たのだよ！」

「ち、ちやかちゃん……」

そう、高らかに告げる青髪の少女、『美樹さやか』に、呆れたように笑うピンクの髪の少女、『鹿目まどか』。

二人は夢の話を語っていて、まどかが『ある夜天変地異の中、魔法を用いて怪物と戦う少女を目撃し、謎の白い生物から「僕と契約して、魔法少女になってほしい」と告げられる夢を見た』という風に語ったら、そのかたられた友達、さやかは先ほどのような夢を見た事を告げたのであった。

「で、でも、さやかちゃんはどこにいたの？その夢」

「出ないよ？ただ、その様子をぼんやりと見てただけ」

「……？どういうことなんだろうね？」

「うーん、ちょっとアタシにもわかんないな」

「あら、鹿目さん、美樹さん、おはようございます」

「あつ、仁美ちゃん。おはよう！」

「おっす仁美！」

まどかとさやかは『仁美』と呼ばれた少女とあいさつをして、学校への道を歩く。

「本当になんだったんだろうなー、あれ」

「うーん、わからないねー」

「おっ、もしかしてあんたら、俺と一緒に学校の生徒？」

「誰よいきなり……ってえええ！？」

後ろから話しかけられ、振り向くとさやかの表情が驚愕に染まる。

「どうしたの？さやかちゃん」

「ま、ま、まどか！この娘！私が夢で見た子！」

「ん？俺の顔に何かついてんのか？」

指を差された少女は自分の顔を掻きながら不思議そうな顔をする。

「いつ、いや、そういうわけじゃないけど……」

「そう。なら別段どうでもいいや。なあ、『市立見滝原中学校』ってこの道で合ってるのか？」

「あつてますけど……どうしたんですか？」

まどかが少女に問いかけると少女は苦笑しながら告げる。

「はは、いや、な？今日から親の仕事の都合でこっちに引っ越してきて一人暮らしすることになったんだけどさあ、転校先の学校の詳しい場所親から教えてもらってねえんだよ。だからおんなじ中学校に通ってそうなやつ探してたのさ」

「そ、そうなんですか」

少女が思ったよりも頬舌だったため、まどかは数歩だけヒク。しかしそれに気づかない少女は、そのまましゃべり続ける。

「いやあ、最初に話しかけた奴がこんなに優しくてよかったわ。いつだったか話しかけたのに無視どころか殴り掛かられたことがあるんだぜ？敵わないよなあ。そんなさ？いきなり殴りかかってきたりするんだぜ？あ、あと俺に敬語は使わなくてもいいぜ。たぶん同級生だからな？」

「ど、どついうこと？」

少女の言葉にまどかが驚いて聞き返すと、少女は前髪を掻き分けながら告げる。

「俺も中2だからな！じゃ、また逢えたら逢おうぜ！俺は職員室行つて手続しねえといけねえからな！」

「うわーあの子すごい美し……」

さやかが途中まで先に入ってきた『暁美さん』の感想を話しているとき、いきなりさやかの声が止まった。まどかも『暁美さん』が夢に出てきた少女であることを考えていたが、それにつられる形で思考停止する。

「じゃあ二人とも、自己紹介を」

「暁美ほむらです。よろしくお願ひします」

「木之下眺だ。これからよろしくな！」

「朝の不思議転校生イイイイイツ!?」

「おっ、いい反応だあな！」ニタツ

「なに『いいなり先が見つかった』みたいな顔してんのよ!？」

「いや、そんなつもりはねえぜ？」ニタニタ

「おっ、男女よりも男らしいな！」

「まあ親に育てられた結果がこれだからな!なあ?男女」

「私よりも男勝りなくせにそのあだ名で呼ぶなああっ!」

さつそく『眺』という少女に弄られまくるさやか。そんな様子を黒髪の少女のもう一人の転校生、『暁美ほむら』はそれを冷たい目で見ていた。

「(この『木之下眺』……今までの時間軸には存在しなかった。何者なの……?)」

胸に疑問を宿しながら。

.....
.....
.....

そして休み時間。晁は転校生にありがちな質問攻めにあいながら、まどかのところまでたどり着いた。

「なあ、お前保健委員なんだろう？」

「え、そうだけど……」

「なら、連れてってくれよ。一応骨折してた時期があったからな。痛み出したから湿布張りたいたんだ」

「えっと、別にいいけど……」

「なら、あそこのアキミさんだっけ？」

「……晁美よ。晁美、ほむら」

いきなり話しかけられ、ほむらは不機嫌を表情に表しながら名前間違いを修正する。

「あんたも、気分悪そうだし一緒にいかねえか？転校してきたばかりだからわからねえだろ？」

「……わかったわ。確かに、ちょっと気分は悪かったし」

晁に予想外の提案をされ、ほむらは確認の意味でもそれを了承する。

「じゃ、よろしくな！えーっと、なんだっけ？お前の名前」

「か、鹿目まどか……だよ？」

「そっか、まどか。これからもよろしくな！」

そっいいながらドアまでヒョコヒョコと歩く晁。どうやら足が痛み出したというのは本当のようだ。

「（あいつじゃないけど、わけがわからないわ）」

まどかと一緒に保健室へと向かう昞を見ながら、ほむらは心の中で呟いた。

.....

保健室へと向かう道の途中、以外にも昞は一言も喋らず、気まずい空間が広がる。

「あの……暁美さん？」

「！……ほむらでいいわ」

まどかから『暁美さん』と呼ばれた瞬間に苦虫をかみつぶしたかのような表情を浮かべ、『ほむらでいい』というほむら。

「ほ、ほむらちゃん……ほむらちゃんって……あの……いい名前だね」

「！」

「……」

「あの……なんていうか……珍しい名前だし……その……」

「……っ」

まどかががんばって話を広げようとする中昞は、

「（……あー、翼にしてももうちょいかっこよくできねーかなー）」

わけのわからないことを考えていた。そんなことを考えてる暇あったらもうちょっと手助けしてやれよ可哀想だろうが。

「(じゃっじめんとですのー)」

考えることすら放棄しやがった。

「鹿目まどか、あなたは自分の人生が尊いと思う？家族や友達を大切にしている？」

「え…う、うん…大切だよ？家族も…友達のみんなも？」

「嘘じゃないわね…？」

「嘘な訳ないよ！私は…本当にみんなのことが大好きだから！」

「なら…今の自分を大切にしなさい、今と違う自分になるうだなんて思わないで」

「さもなければ…すべてを失うことになるわ」

「……？」

それなりに真面目な雰囲気な中でも、

「(あぁー、夕飯何にするかなー)」

聞いちゃいねえ。

.....

CD屋の前。

「ごめんね、まどか、いつもつきあわせちゃって」

「ううん、気にしないで、私も音楽、好きだから」

「『ごめんね、まどか、いつもつきあわせちゃって』キリッ……だ

っしゅれ」

「あの、馬鹿にするなら帰ってくれない？あと何その声真似やけにうまいな」

完璧な声帯模写によりさやかを弄る昞。

「いやぁ、俺も音楽が好きでな？たまにふらっと来たくなるのさ」

「へえ、何が好きなの？」

「『与作』」

「渋っ！？」

「あ！私も好きなんだー『与作』！」

「ああ、サブちゃんのゴブシはいいものだよな！」

「ええー……なにこれ、私一瞬で蚊帳の外……」

さやかは演歌話に花を咲かせるまどかと昞を見ながら淋しそうに告げる。

『助けて……まどか！』

「「！？」」

「ど、どうしたの二人とも、いきなりびくってして……」

「っ……！！」

「呼ばれたの！」

「は、はあ！？」

「なんだよ……この世界でもあるのかよ！」

「ちょ、昞！？」

「行かないきゃ！」

「ま、まどか！？なんなのよ、もう！」

昞とまどかはいきなり走り出し、さやかもその後を追った。

.....

.....

「なにこれ……見たこともない生き物だけど……お医者さんに連れて行かなきゃ」

「……いや、無駄だな。こんな生き物、存在しないはずだ……」
「でも！怪我してるのにはうっておくなんて！」

「現実を見る！それでお前は満足してもこの不思議生物にとってはここで朽ち果てるのが望みかもしれねえだろ！？」

「なんで朽ち果てること前提で話を進めてるの！？」

「なんかこいつ生理的に気に食わない！」

「そんな理由で！？」

「あ、あの、二人とも……？ちょっとついていけないんだけどー」

「……」

「「さやか(ちゃん)は黙って(ろ)(て)！」」

「……ええー……？」

そんな言い争いをしているそばから、周りが不可思議、非現実的、そつとくらいしか表現できない空間が広がっていく。

「道が……！！？」

「結界！？でも、内部も変える結界なんて聞いたことが……！！？」

「なにか、動いた……？」

まどかがそう告げた次の瞬間。

銃声が響き、床にいた白い生物の近くに銃弾が撥ねた。

「んなつ！？」

「何が起こったの！？」

「そいつからすぐに離れなさい」

「ほむらちゃん!?!」

「アキミ!?!」

「暁美よ。それより、そいつを渡して」

「はい了」だめ!それより、なんでこんなことするの!?!「……………」

「今さっきまでの私の気持ちわかった?」

「ああ、すごく……………」

暗闇から現れたほむらに暁が白い生物を渡そうと持った瞬間、まどかがそれをひったくって抱きかかえながら拒否し、暁が落ち込む。カオスすぎる。

「今!」

「うおっ!?!」

「まどか、暁!逃げるよ!」

そしてさやかはどこからか消火器を取り出し、ほむらに向けて発射。目晦ましに使った後走り始める。

「……………危ない!」

そしてほむらを撒いてすぐに暁が叫んでさやかを横に突き飛ばす。その瞬間暁の腕を影が通り過ぎ、暁の腕の影の通った痕から鮮血が噴き出る。

「なによ、これ」

「ちっ、怪物か……………」

そこにいたのはコミカルな髭と細い腕をつけ、胴体に無理やり超を接続した綿埃。普通の少女ならば気絶物の化け物を見ても、まど

か、さやかはそもその恐怖、暁は得体のしれない何かによって気を失わず立っている。

「そ、そうだ、夢なんだ、きつと悪い夢なんだよねこれ！そうだなまどかぁ!？」

「……下がって口。俺が何とかする」

暁のその言葉とともになぜか震えていた体は震えが収まり、安心感が広がっていく。

「化け物には、こいつだろ」

暁は懐からバツクル『ダークデイケイドライバー』を取り出し腰に装着。そしてカードケース『ライドブツカー』から一枚のカードを取り出す。

「……変身!」

そして暁はバツクルを開きその中にカードを装填し、バツクルを閉める。

『KAMEN RIDE . . . DECADE』!』

そして電子音声が鳴り響き、九つの灰色のシルエットが重なり、暁は、『ダークデイケイド』への変身を遂げる。

「bfouabbsfnnsjddina」

「何言ってるのかはしらねえが」

茨を伸ばしてくる化け物に、暁はライドブツカーを剣へと変えな

から告げる。

「余程、死にたいと見える」

そして剣戟により茨を切り裂く。

「てやあっ!」

そしてとびかかった瞬間。

茨が床から伸び、昉を縛り付けた。

「ぐあああああっ!?!」

締め付けられ、昉は呻き声をあげる。それとともにさやか、まどかの体に震えが戻る。

「くう……予想、外、すぎん、だろ」

昉は悪態をつきながら辺りを見回す。

そこもかしこも化け物だらけ、どこからかあらわれたハサミは一人で刃を打ち鳴らす。

「……こりゃあ、絶体絶命ってところかねえ」

少しずつ押し返し、どうにかライトブッカーを握りなおした瞬間。いきなり金色の光が奔り、昉を縛っていた茨をちぎり、周りの化け物も大きくその数を減らす。

「……!?!?何かわからねえけど、止めだ!」

『FINAL ATTACK RIDE・・・DECADE』!

そして昞はライドブツカーからカードをバツクルに装填。電子音
声が鳴り響き、目の前にカード型のエネルギーが浮かび上がる。

「てあっ」

そして昞は飛び上がり、エネルギーもそれに合わせ、昞と化け物
の間に入るようになる。

「せりやあああっ!」

そして昞はそのエネルギーを潜り抜け、化け物へとキックを浴び
せる。そうすると化け物は勢いよく爆発し、一つの塊を落とす。

「…………?なんだ、これ?」

昞は変身を解除しながらそれを拾い上げ、不思議そうに眺める。

「あら、お邪魔だったかしら?」

「ン?ああ、いや、助かった。なんとか行けるかとは思っていたが、
最初の不意打ちが以外と響いていたらしくてな。左腕があまり動か
ない」

そう告げる昞の左手は、血濡れのままピクリとも動かなくなって
いた。

「ちょっと見せてみて?」

「あ、ああ」

そう言うと金髪の少女は暁の左腕をとると、手をかざす。そうすると暁の左腕が光に包まれ、先ほどまで滴っていた血も止まり、拳も握れるほどに回復する。

「（治癒魔法……！？しかし、魔力反応は……）」
「マミィ！」

暁が驚き、考え事をしていると、まどかの腕の中の白い摩可思議生物が目を開け、金髪の少女の名を呼ぶ。

「キュウベえ！そこにいたのね！」
「キュウベえ？……どこかで聞いた響きなような……」

そして『マミィ』と呼ばれた少女が白い摩可思議生物を呼ぶと、暁は考え事を始める。

「（キュウベえ……インキュベー……あーっ！もう少しで思い出せそうなのに思い出せねーっ！）」
「ひ、暁？ごめんね、私が気づかなかったせいで……」

暁が百面相をしているのを見て、さやかは純粹に心配する。

「んあ？あーっ、俺は別に気にしねえよ。俺が好きでやったことだしさあ」
「そ、そう？いやー、あんたの事だからそれをネタにしてみたまた弄ってくるかと」
「……おい、お前の中での俺はどんだけひでえんだよ……」

暁は肩を落としながらゆっくりと呟く。結構心に来るものがあるようだ。

「えっと、そういうばあなたは誰なんですか？」

「あっ、まだ自己紹介していなかったわね。私は巴マミ。そういえば、その制服、見滝原中のよね？私はその三年なの」

「……せ、い、ふく……？」

暁ははっとしたように自分の左腕を確かめる。そこにはまぎれもなく、自身の血液で使い物にならなくなった制服。

「……新品だったのになア……！」

「……なんかゴメン」

暁の血涙を見て、さらに罪悪感が湧いたさやかであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2856z/>

魔法少女まどか マギカ ~ヒカルヤミノハカイシャ~

2011年12月10日01時48分発行